

太 棹

文 樂 研 究 特 輯



老田方
しげを画

第 百 六 號

東 京 太 棹 社 發 行

胃腸にミカラチ

東京市日本橋區酒町二ノ十
 新潮製藥株式會社
 電話 茅場町三八一三番
 振替東京十〇一〇八番

松 幸

すき焼

和洋御料理

淺草公園 (千束二ノ三四)

牛鍋本店

電話根岸 (87) 〇三八〇番
 二〇〇〇番

風流・金ぷら・茶漬

【美地句】

去月屋

新橋二ノ八
 電銀二〇八

太 棹

文 樂 研 究 特 輯

第 六 百 六 十 號

祈 皇 軍 武 運 長 久

(揭載芳名順不同)

暑 中 御 見 舞

坂
倉
素
遊

勝
田
松
雨

東京市淀橋區戸塚町三ノ九〇一
電話牛込五五〇〇番

暑 中 御 見 舞

安 藤 ど ぐ る

暑 中 御 見 舞

武
笠
宏
亮

齋
藤
山
生

電話足立三二四二番

暑 中 御 見 舞

鈴

木

松

寶

暑 中 御 見 舞

白
井
清
華

金
田
金
鳳

暑 中 御 見 舞

中

澤

巴

暑 中 御 見 舞

井

上

巽

小

林

和

舟

暑 中 御 見 舞

近
江
清
華

暑 中 御 見 舞

長 谷 川 文 久

星 野 桔 梗

吉 田 三 芳

安 藤 光 樂

暑 中 御 見 舞

東 都 五 十 義 會 々 長

細 川 清

本所區東兩國二丁目四
電話本所〇八一八番

暑 中 御 見 舞

東都五十義會

事務所

京橋區木挽町四—二(吉田方)
電話 京橋 〇〇六六〇〇四番
〇〇六〇〇五番

藤本喜鳳

水道衛生器具
瓦斯電氣器具
汚水淨化裝置
暖房給湯工事
水道衛生工事

東京市指定

手塚佐市商店

てつか

東京市京橋區西八丁堀四ノ二ノ一
電話 京橋(56) 一一三四一番
振替 東京 九一二一三番

暑 中 御 見 舞

鈴
木
和
樂

高
橋
可
遊

野
口
み
な
と

緒
方
千
晴

暑 中 御 見 舞

大用大嘉津

及川旭

乃村乃菊

丸都改

國井やまと

暑 中 御 見 舞

川 奈 部 銀 司

大 築 葵

吉 川 浪 補

菊 池 秋 月

暑 中 御 見 舞

高
瀬
操

湯
原
清
司

錦
錦
松

廣
瀬
い
ろ
は

暑 中 御 見 舞

岩 木 義 雀

松 岡 茂 里 雄

平 井 榮

小 埜 長 と ろ

暑 中 御 見 舞

小林太二八

岡田蝶花形

井上素鳳

安藤都昇

暑 中 御 見 舞

淺
田
奇
聲

原
田
越
巴

小 小
川 川
都 都
川 山

水
戶
部
壽

暑 中 御 見 舞

京濱素義聯盟會長

國 友 東 光

品川區大井
水神町二〇三六

湯 淺 光 玉
岡 本 柳 光

巴 雪 會

阿 部 一
高 山 和 子
梅 村 梅 聲
長 澤 喜 遊

暑 中 御 見 舞

根
本
團
壽

鶴 神

澤 馬

勝 里

助 芳

吉
田
登
盛

野
澤
彖
造

暑 中 御 見 舞

日 本 大 阪 因 會

男 女 太 夫 三 味 線 一 同

事 務 所 大 阪 市 住 吉 區 長 峽 町 四 七 村 上 卯 之 吉 方

日 本 帝 都 義 太 夫 因 會

男 子 部 一 同

事 務 所 日 本 橋 區 蠣 殼 町 一 丁 目 六
電 話 茅 場 町 一 九 二 七 番

暑 中 御 見 舞

竹本都太夫

鶴澤司好

野澤語左衛門

鶴澤寬三郎

野澤道之助

暑 中 御 見 舞

竹 本 素 女

竹 本 佳 照

義 太 夫 座

竹 本 駒 若

自 宅

淺 草 區 田 島 町 二 七
電 話 淺 草 三 六 三 〇 番

豐 竹 巴 住
豐 竹 昇 登

盛夏御機嫌奉伺

東京人形淨瑠璃芝居

南 北 座

東京市目黒區中目黒
四丁目一四七五番地
電話大崎三八二九番

暑中御見舞

北支河北省景縣城内

三景事

竹澤龍造

外一 同

女優娘歌舞伎家元

竹澤龍造補導一座

主幹 竹澤龜次郎

外一 同

熱海市旭町

新 鈴 よ し

三 鶴 勝
外 一 同
松

暑 中 御 見 舞

綾 秀 會

(順 は ろ い)

竹	島	笹	酒	嵐	藤	山	南	米
本	田	本	井		原	田	條	澤
綾	綾	竹	龍	司	綾	壽	壽	八
秀	登	始	司	光	路	瓢	光	雲

義 松 會

豐	豐	澤	片	田	三	正
澤	澤	邊	倉	中	口	田
松	松	松	松	司	松	大
四	造	治	嘉	若	藤	龍
郎						

暑 中 御 見 舞

銀
座
義
榮
會

香
伯
會

暑 中 御 見 舞

淨 曲 無 名 會

(見 後)

事 務 所

神 田 區 花 房 町 三

(河 野 方)

電 話 下 谷 五 四 〇 〇 番

(イロハ順)

安 藤 と ぐ ろ
保 々 長 平
河 野 國 聲
高 瀬 操
桑 原 美 峰
鈴 木 和 樂
星 野 桔 梗

朝 見 會

野 中 一 竹
白 井 井 孝
松 岡 波 朝
青 島 廣 昇
山 崎 昇 朝
島 倉 松 香
平 井 壽 樂
竹 本 朝 見 太 夫

(イロハ順)

暑 中 御 見 舞

巴 津 天 會

會 長

寶 藏 寺 天 昇

相 談 役 宮 島 和 紅

常 務 理 事 武 藤 壽 昇

事 務 長 長 谷 川 勇 昇

顧 問

竹 本 巴 津 昇

事 務 所

杉並區和田本町九五
一竹本巴津昇方
電話中野五七九三番

暑 中 御 見 舞

駒 登 會

橘 一 素 つ 雅 富 高 壽 力 金 久 美 豊

豊竹駒登太夫

義 司 龍 彌 尾 穗 樂 み 博 鶴

ほ

芳 聲 會

里 辰 一 千 清 芳 壽 重 壺 芳

豊澤芳太郎

(イロハ順)

暑 中 御 見 舞

中老會

(順 八 口 一)

和 北 西 保 原 柳 淺 高 木 松 沼

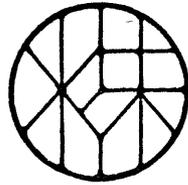
田 島 田 谷 田 田 瀨 下 岡 井

春 北 可 紅 越 有 奇 松 里 盛 茂

和 斗 松 司 巴 明 聲 操 玉 雄 鶴

事務所
淺草區象潟町一丁目五番
電話根岸一五二番

暑 中 御 見 舞



兜

事 務 所

會

日本橋區兜町一丁目四番地
鈴木甚四郎方
電話茅場町二二五五六六番

暑 中 御 見 舞

株式會社

大彌商會

八幡市通町十六丁目

電話 八四一・二五六〇番
專用一・二四六六番

古賀大彌

古賀房千代

古賀昇之助

古賀お茶

社員 皆上九洲翁

稻田稻雀

兵庫縣垂水町

岡田源

大垣市城畔

吉岡十八公

暑 中 御 見 舞

名 作 淨 瑠 璃 同 好 會

川 口 子 太 郎

(イロハ順)

高 橋 宮 古

谷 口 王 華

中 川 愛 氷

久 米 忠 二

松 浦 淀 橋

仙 台 八 雲

豐 竹 和 孝

事務所

京橋區橫町三丁目五
川口子太郎方

電話京橋四八七七番

太 棹 社

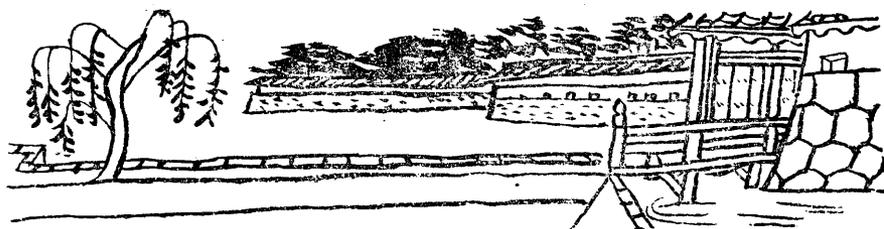
富 取 芳 河 士

同 三 久 子

關 本 邦 治

栗 原 印 刷 所

牛込區早稻田町五八
電話牛込一四五一番



太 棹 第百六號目次

希 望 三 つ 齋藤拳三 (二)

文樂座の藝題選擇に就て (四)

伊原青々園・山崎紫紅・笹川臨風・額田六福・近松秋江
 久保田金僊・齋藤拳三・佐藤紅綠・木谷蓬吟・徳田秋聲
 本山荻舟・田中煙亭・濱村米藏

淨 曲 三 絃 閑 話 (一) 是澤九似廬 (一〇)

實 事 譚 中野三允 (二四)

ラ ズ 才 淨 曲 漫 評 金 王 丸 (二七)

増補大江山『辰橋』を聴くにつけ 机 枕 野 堂 (三三)

『太 棹』 總 目 次 (五) (三四)

會 報 (三七)

小 樽 に て の 素 義 會 岡田蝶花形 (二九)

太 棹 社 彙 報 (三〇)

表 紙 ・ カ ッ ト 宮尾しげを

希望 三三

齋藤拳 三三

亦盛夏東上する文樂人形淨瑠璃に就て何か希望でも感想でも書けとの御註文である。

私は人形淨瑠璃に對しては極度に悲觀的である、あと壽命の少いものである。だから好き者は上京する度に必ず見とく方がいゝ、此れが結論である。

だが此れだけでは誠にあつけない、其處で今日での文樂の持つ長所を、少しでも長く持ち續けて行くのにはどんな案があるか、此れが三つの希望である。

(一) 太夫、三味線とも引退すべからず

最近引退した土佐太夫、吉兵衛、友次郎の三人は、現代での名手である以上、當人一人の立場を別にして、ファンの方から云ふと大きな損失である。

土佐太夫も文樂を離れて自由な立場にあつた方が、どしどし研究的なものが聽かれそうに思へたが、やはり事實は全く反對である。

友次郎にしても、毎日自宅で熱心に後進の指導にあたつて居ても、やはり伊達太夫を弾いても高座に出て居た方が、見

物側からは結構である。新左衛門、道八にしても、永久に引退しない事を望んで置く。特に日本音楽は何の記録もなく、名人上手が個人から個人へ秘傳的に繼承して行く特色から見ても、古老の長壽の内の一つでも多く其の造詣を取り入れて置く事は斯道の急務である。

(二) 文樂座は淨瑠璃が主であつて人形は従である

一時東京に人形使を擁護する團體が生れた。即ち淨瑠璃は獨立して生存して行けるが、人形使ひは特種の保護を加へない以上、人形淨瑠璃は亡びると云ふのが其の主眼であつた。此れは若い人形使ひに美服を着ることを教へ、無邪氣な彼等に、東京の客は自分等と呼んでゐるのだと云ふあやまつた自負心を、植付けてしまつた傾向である。

昔から人氣のある太夫が、單獨巡業に出た爲に失業した人形使は、逆に人氣のある人形使ひの滿洲巡業の爲に、文樂座の本興行が延期されると云つた珍風景を演出してしまつた、然し何としても文樂を觀賞する側から云ふと、其の興行政策は人氣のある太夫の出現に待つもので、事實、今の文樂座に

して見ても、比較論をやれば人形より義太夫の方がずつと名手が多い。

私は義太夫に理解を持たないで、人形の様式美のみに興味を持つて文樂に行く、観客層の多い事を決して否定しやうとするものではないが、其れも度を過ぎては甚だ困る。

前進座は忠臣蔵を演出するに先づ文樂の忠臣蔵を勉強したと云ふ。私はふき出した。此れは三段目に本蔵が判官をだき止める件を人形式に演るのと、裏門をやるだけの結果となつただけだつた。流石は菊五郎で「ども又」を演るにしても津太夫の淨瑠璃を聴くだけである。

文樂の觀賞は先づ人形を見に行く、段々數を重て行くと最後は淨瑠璃を主としてくる處まで行きつく、若い役者が人形を見に行くのは義太夫の解つてない證據なのである。

(三)人形芝居には舞臺監督の必要急務なり

東京で買かぶられた藝人の第一は人形使ひであらふ。然し私は今まで此れを非常に喜んで居た、今の文樂の古老の人形使ひは、せめても今のまゝで世を終らせたいと思つたからである、然し若い人形使ひはこれでは困る。中には淨瑠璃の文句の意味が全然解らずに人形を動して居る人もある、即ち人形使ひは人形を使ふ憲法さへ勉べば事たれりと思つて居る人が相當多い。此れは若い學生さんなどには信じられまいと思ふから實例を上げて見よう。

沼津の千本松原で平作が十兵衛に印籠の持主を聞く、すると十兵衛は其の名を云へば敵の藥で疵本腹となり、「眞逆の時切先がなまらふぞや」と云ふ、此の件で人形は十兵衛が刀に手をかける、これは如何にも腹を切れとのなぞの様に見へるがどうかと、私はある人形使ひに云つたものだ、すると、其

の若い人形使ひは、十兵衛の本意は腹を切れば教へてもいいと云ふ眞意だと云ふのである、私は全く驚いた、此れでは沼津の一段は全くめちや／＼である、何處に親殺しの目的で千本松原に行く十兵衛があるだらう。

亦私の友人Aは寺子屋の「詮議に及ばぬ連れうせろ」は松王、玄蕃、いづれの地合かと聞かれた事があつた。成程此の時のツメの人形は松王の顔も玄蕃の顔も見えないからである、此の二つの事實を讀んだ讀者は、まづ若い人形使ひには淨瑠璃一段の眞味だけでも教へる機關がなければ、人形芝居はどうにもならぬと云ふ事が解るであらう。

手輕な一案としては太夫、三味線の古老に、一幕の説明をさせて責任を持たせるのも一策であらう。

私は鶴澤友次郎宅に女義の稽古を見學に來て居る重造を見た、清次郎と同行で打ち合せに來る駒太夫の事を聞いた。

自宅に床が出来て居て其處で毎日練習して居る古靱太夫、清六の稽古を聴いて、同じく其の場で織太夫、團六の稽古を聴いた、全く頼もしくも嬉しい風景である。人形使ひもこれと同等の勉強はしなければなるまいと思ふ。

震災前の新富座へ始めて文樂座が東上した時、太夫、三味線は宿屋へ泊つて人形使ひだけは樂屋へ寝かされた、其の差別待遇を怒つた吉田文三は二度と東京へは來ないと云つて手錢で宿へいつて寝た。當時に比すれば人形使ひの待遇は向上されて居る、昔の名人は可成の貧苦と戰つて藝をみがいた、若い人形使ひもつと勉強してもいいと思ふ。

講談華やかなりし時、吉瓶、貞吉、一の名人は皆陋巷に窮死した、其の斯道衰滅にひんして貞山、伯鶴は巨萬の私財を殘した。藝界とは皆こんなものかしらと私はあじけなく思ふのである。

文樂座の藝題選擇に就て

— 順不同 —

★

伊原青々園

出し物がいつも同じで面白くないから、變つたものを出せといふ説もありますが、小生は賛成しません。變つたものといへば昔から在るもので、今日はあまり出ないものか、でなくば全然新作を出すより他にありませんが、義太夫に新作のいけない事は能樂と同様です。また昔から在るもので今日はあまり出ないものといへば、見物には馴染みが薄く、かつ大抵面白くない作です。多少の例外はあるかも知れませんが、面白いくらゐなら吃度頻繁に出してゐる筈です。

もう一つ古いものを始から終まで通して出せといふ説もありますが、それは時間も許さないうし、時間が許しても途中で見物が退屈するにきまつてゐます。

結局、今日のやうな出し物の選び方が一番至當なのではありませんまいか。

しかし「文樂座の藝題」といふから右のやうな結論になりますが、義太夫淨瑠璃と人形芝居の合併した「文樂座」でな

く、義太夫は義太夫だけ、人形は人形だけ、別々にして考へると、其處に意見があります。例へば義太夫の方だけでいへば、人形によらないで素語りか子供首振りにするやうな方法、また人形の方だけでいへば、義太夫によらないで、豊後淨瑠璃とか説經とか、又は浪花節とかによる方法を執るとして、その場合には藝題の選び方が大いにあります。しかも斯様にして、義太夫と人形とを分離さす事が、或は兩者を活かす道かも知れません。尙ほこれについては詳しくいひたいけれど、長くなりますから略します。

★

山崎紫紅

御申越の一條、小生には「千本櫻」の通しを演じさせたく「忠臣藏」は度々ながら、見た目もよく語り場も多き「千本櫻」がなぜ出ぬものか。序の河越の上使場、渡海屋、鮎屋、道行、御殿を通したら、大當りは受負と思はれる。これを一度上場の意見を逸早く申して見る。

★

笹川臨風

いつか桐竹紋十郎が尋ねて來ました時に、文樂座の出し物がいつも極つてゐて、紋切形になり過ぎるぢやないかと申しましたところ、こちらは餘り出さないものを選定して出すのですが、松竹が許可してくれず、不相變のものばかりに變へてくれますので困りますと言つておました。これでは何を註文して見たところが結局駄目です。營利本位の興行政策を打破しなければ、目新しいものを期待する譯にはゆきません。

★

額田六福

文樂の事は言つた處で仕方がありません。もう何も言はないつもり、したがつて見にもゆかないでせう。

★

近松秋江

文樂座の藝術が年々時代と離れて行きつゝあることは、夙に私どもの遺憾に堪えざる所であります。之は致し方もないことで、今の人は芝居よりも映畫の方を好むのは無理からぬ

ことで、映畫といふものが出來た以上、古い藝術は大半喰はれてしまふ。丁度一般觀衆の今日の映畫を喰り見た通りに、昔は操り人形などを見て喜んでゐたものでせう。其處で文樂座の藝術をして今日の時代に尙ほ存せしむるには、今日の大衆に通りの好い出し物を選ばねばならぬことは當然である。

幾ら一般大衆に通りのよいものでも、今日の四十歳以下の男女には義太夫といふものゝ味が殆どわからない、況んや丸本ものゝ全部に亙つては更に興味が持てない。一例を言へば「伽羅先代萩」にしても「御殿の場」とか「菅原傳授手習鑑」にしても「寺子屋」の段の外は一向に興味が乏しい。特別に文藝を研究する志のある人でない限り、興味を持たないのは當然である。面白いトキーで現代人の血の流れてゐる潑刺とした見る物があるのに、まどろしい操り人形を見て半日を過す事は現代人には我慢が出來ない。

ところが文樂座の出し物の選び方を見てゐると、何時もあまりに玄人好みでありすぎる、一般聽衆に分りのよい「政岡忠義の段」とか「二十四孝」とか「朝顔日記」とか「寺子屋の段」とか「太功記十段目」とか云つたものでさへ、今日四十代以下の若い男女には興味がないのに、厭に凝つた義太夫通でなければ分らぬやうなダレ場の多いものを殊更に選んで並べると云ふことはどうした考へか私には分らない。

之は文樂座ばかりとは申さないが、例へばラヂオの放送などでも、義太夫を三十分出すなら前申した人口に膾炙してゐ

る「政岡忠義の段」とか「寺子屋の段」とか「堀川猿廻し」とか「朝顔日記」とか「三勝半七」とか「二十四孝」とか云つたものを放送すればよいと思ふのに、大阪から(JOBK)放送さるゝものと言へば、きつと義太夫通にのみ知られたやうなものばかりである。之は餘つ程考へ物だ。

文樂座が時代に生きんとすれば、この際大いに考へて一般聴衆に通りのよい出し物を選ぶべきである。度々繰りかへした通り、我々には米の飯の如く夙に熟知してゐる「政岡忠義」「寺子屋」などですら、今の若い男女には興味がないのであるから、それ以上のものは興味の有りやうがない。

しかしよいものはやつぱりよい、不朽の人性に訴へたものには萬古不易の味ひがある。之等のものは永久に不滅の滅私奉公と個人の幸福との矛盾衝突を歎した悲劇である。今日の時局下について思つて見ても、政岡や松王や熊谷直實のやうな悲劇は少くあるまい。

★

久保田金僊

小生は元來義太夫愛好者に御座候そして最近やゝ隆盛の徴を見し女義に就ては相當昔しからかくれたるフアンの一人に御座候

今から四十三年前のことです、尾崎紅葉氏の發意にて竹本

美根吉を後援したと有之、同人は堀紫山君令闈の姉のやうに聞いて居ります。それで、ある寄席にて眞打になりました時(正月)うしろ幕を贈ることになつて、小生が描畫雪中の梅花を揮毫し、文字は紅葉山人自ら筆をとつて宛て名とそして贈り主の名前を記されました。その連名には尾崎紅葉をはじめ、巖谷小波、江見水蔭、田村江東、川上眉山など流々たる人達から贈つたもの、今考へるとむしろ滑稽のやうにも思はれますが、そのうしろ幕が現在遺つて居つたなら大したものであらうと思ひます。

さて文樂についての藝題については左の題名を参考に申上ります。

伊賀越道中双六(通し)

妹脊山女庭訓(通し)

等々を選び、そして見たいと思ふてをります。夏狂言としては「夏祭團七九郎兵衛」など如何。

★

齋藤拳三

私の見たい人形芝居は古靱太夫の「彦山の毛谷村」「矢口の渡し」「渡海屋」、津太夫の「新版歌祭文の油屋」「白城屋」「大文字屋」です。

★

佐藤紅緑

文樂座の藝題撰擇に就ての御下問、實に當今日本藝界に於ける最も大切なる問題と存候老生の如き老人は如何なる出し物にても興味深く感じ候へども四十前後の人には一向興味なく、三十前後に至つては義太夫もわからず歴史もわからず時代の古典趣味も解らざるべく又た解ることを望まざる様に見受けられ候是に於て淨瑠璃なるものは全然普遍性を失ひ候事止むを得ざる儀と存候この故に淨瑠璃を保全せんとすれば、古來の形式に大斧鉞を加へざるべからず、左れども如何なる者を存し如何なる者を削るかは中々の大問題にて、角を矯めて牛を殺すよりは、角を矯めざるを賢しとせざるべからず、老生等には面白しと思ふ者も若き人々には只だ怠屈を催すばかりにては手の着けやうも無之候要するに老生に於ては何も彼も昔通りに保存したく候へども其れにては時代に適應いたしまじく、只だ一つの案としては寺子屋とか熊谷陣屋とか天網島などの一幕や二幕を嚴密なる古式に遵據せしめ、他の長幕ものはどしどし改竄省略して時代に適應さする方法を取りては如何に候や人形の舞踊方法も今少し考究すれば必らず新工夫を得らるべくと存候

戰爭以來、國民の趣味は次第に日本的になり古典藝術の復

活も見込みなきにあらず、當事者一段の奮起を熱望仕候兎に角舊き思想に囚はれず、今よりより新らしき意味に於ける古典藝術の振興に向つて邁進すべき時機と存候
老生なども兎角昔が懐かしく何事も昔の方法を勝れりと思ひ候故に自然と時代に後れる事となり候一切を棄て、而して亦た一切を活かす事肝要と存候

★

木谷蓬吟

文樂座の藝題撰擇に就ての愚見を訊はれましたが、實は、文樂座に關するあらゆる問題に就ては、既に十數年前を限界として、イヤと云ふほど愚見發表をしたのですから、今日では、たゞそれを蒸しかへすに過ぎませぬので、一向熱も興味もないやうな始末です。誰れかゞ批評されたやうに、どうやら近年「文樂不感症」に罹つて居るらしいのです。

★

徳田秋聲

私は古い趣味から成るべく脱出しようと思つてゐますけれど、子供の時分から聽いて來た義太夫、太棹の音にはなかなか懐しいものがあります。

一般大衆が昔しのやうに切めてこれを聴いてくれるかと思はれますが、今日のやうに浪曲へと下落しては仕方ありません。義太夫には日本風のロオマンズがあり、日本人の眞の感情が盛られてゐるとおもひますが、私は現實主義の立場にある癖に、歌舞伎や義太夫はロマンチックのものが好きですから、お問合せに對しても、その種類を擧げるより外ありません。

二十四孝とか、妹脊山とか、千本櫻とか、祇園信仰記、鎌倉三代記、盛衰記とか言つた種類のものです。興行能率が何うあるかは別問題です。この中には西洋のオペラにも劣らないテーマを扱つたものもあり、日本人の性格、感情、神経が奔放に、しかも或るものは幻想的なベールにつままれて盛れあがつてゐます。

大體日本の音曲は長唄の或るものを除く外、物語風に作られたものが多いので、義太夫も嚴密にいふ音楽か否かは解りませんが、聲調と三味線には驚くべき鍛錬があり、長く民衆を樂ませて來たのですが東京人には餘り向かないやうです。

この頃文樂が東京で受けるのは、目で見る人形であり、淨瑠璃を聴く耳ではないので、ラヂオなどでもホンのお義理にぐいゝ端折つたところをぼつちり放送するに過ぎないのは、時代といふよりか趣味が低下したためであり、筋の聴き取り非音楽的な浪曲が一般に受けるのも、大衆が理屈を知りたがり、音楽を聴く耳をもたないからでせう。

私なども津太夫が櫓下を退けば、文樂とは永久にお別れになるだらうと思つてゐますが、其の頃には文樂の影も一段薄くなるのではないでせうか。

★

山本 荻舟

通し狂言か、通し興行か、どつちかを選ばない限り、文樂はますゝ行詰る外あるまい。

一幕物を並べるのは、素人芝居のことである。素人芝居の發展した例しはない。

一幕物を並べるやうになつて、歌舞伎は漸次行詰つた。人間の芝居以上といはれ、恐らく自信してゐるだらう文樂が、行詰つた歌舞伎の眞似をする必要がどこにある。文樂でなくては見られない通し狂言を、たとへ冒險的にもせよ、思ひきつてやつて見るがよい。

行詰つたといふ歌舞伎でも、一興行同一狂言で通すのに、三日や四日の短期間で、目まぐるしく狂言を替へるのは、旅興行の事である。文樂の東京出開帳を、旅興行とするならそれまでだが、いくら東京のファンが、擁護したいと思つても、旅興行の扱ひを受けたのでは、肩の入れやうがあるまい。

よい狂言を選んで、みつちり腰を据えて、眞劍の演技を觀聽させるなら、新しいファンはまだゝ加はる筈だ。自ら輕

んじて他から重んぜられる道理はない。
せめに問題になつてゐる『千本櫻』の通し位、この際出し
て見る勇氣を望む。

★

田中煙亭

◇昔のやうに通し狂言を出して、中幕なり、追出しに景事、
をどりもの、などを添える並べ方をしろ、といふのは、もう
可なり唱へ古るされた常識らしい。

◇…が、それが決して、經營者側の御採用にはならない。そ
れは、いろ／＼の事情や理屈があるに違ひなく、直ちに「怪
しからん」とか「つまらない」とか、罵り去るのは可から
せう。屢々唱へられたといつても、實は、それは、全體から
觀て、極めて少數者の意見でしかなく、一般大衆は、どうで
も可い、といふのか、又現在の立て方の方がおもしろいのか
も知れぬ。要するに、多數は、それほど關心すら、文樂に
對して、人形淨瑠璃に對して、有つて居らぬとおもふ。

◇…今の歌舞伎芝居のその如く、大幹部は銘々に演し物
をしなければ納まらず、紋下は勿論、それ／＼その地位なり
得意なりを語らせる仕打側の苦心は、中々容易なことではあ
るまい。又たそれと同時に、人形使ひにしても、榮三、文五
郎、紋十郎などには、役々を考慮しなければならず、斯う考
へて來ると、我々は、唯だもう、お見せ下さるものを、謹ん
で拜見してゐるのですネ。たとへそれが、ア、又か、といふ
ものでも、——經營者の方は、お客は常に新陳代謝してゐる
とおもつてゐると、義理の御連中は何を出しても來て下さ

る、と高を括つてゐる譯でせう。

◇…：僕一個の出来ない相談を申せば、二段目、三段目、四
段目だけを、何か通し狂言に、それへ景事なり、チャリ——
これは特に立派なチャリ語りが欲しい——を一幕位。そして
津大夫、古靱太夫の御兩人には、右の三段目と四段目を、時
々打つて替へに語つて貰つたら、又おもしろからうとおもふ
◇…：下らぬ事を長々と、申譯がありません。新作上るり問
題は、別問題になるとおもひます。以上

★

濱村米藏

御質問の件ですが、別に意見らしいものを、差當り持ち合
せて居りません。只今思ひつくまゝに、去年の七月新橋演舞
場で、確か二日目と覚えてゐます、古靱が『辨慶上使』を語
り、次は津大夫の『寺子屋』でした。かう身替り物が二つ積
いて、しかも『辨慶上使』のやうな語物としては兎も角、文
學的といひますか、餘り内容の優れてゐないものは、聽いて
ゐてヒドク疲れます。

そこで、さう専門家でない、一般の聽衆のことも考へて、
文樂の出張公演の藝題は、古くつて、しかも永い生命を持ち
うるもの、即ち内容の優れたものを、なるべく聽かせて貰ひ
たいと思ひます。

文樂のやうな藝は、古い程價打がありますから、餘り新ら
しい工夫の加はらない、出来るだけシツトリした古い香ひを
漂はせて貰ひたいと願ふのみです。

私は、文樂の新作物にさう意味を認める譯に行きません。



浄曲三絃閑話

(一)

是澤九似廬

凡ての藝道の内で義太夫の三味線弾ほど氣の毒なものはない、いつも縁の下の力持ちばかりで、外見は派手にあつても上手になるほど澁くなる藝で、一生涯名聲を望んだり、功名心に驅られたりしては、とても上手な弾手にはならぬ。とりわけて、他の藝ごとと比較して収入が些いために、生活關係が動搖して、いつも不安があり、之に反して藝そのものは修業が非常に厳しくて、子供の折から充分に叩き込まれぬ限りは、到底一人前の藝にはならぬ。その上に、自己を空しうする心懸けが肝要で、普通^{なみ}たいていの辛棒ではない。それにつけても、思ひ出さるゝは先代野澤吉兵衛氏(六代目)のやうな自己犠牲の藝術家の出現したことである、氏は若い頃から越路太夫の相三味線で、永い間終始一貫して、いつも越路の淨瑠璃の蔭にかくれつゝ守護して來て、越路が文樂座の樽下となり、斯界の第一人者となるまで大成せしめた。蔭の吉兵衛氏の功績は、寔に敬服するところで、相三味線としての理想的の女房役であつた。自分は先代吉兵衛氏とは交際がな

かつたのみか、實のところ、團平、廣助の兩師の藝風や、先々代の野澤吉兵衛氏(東京烏森で死去せられた人)の牙え切つた音色の藝や、その當時の上手と云はれた幾人の三味線を、子供のときから聴き馴れ、耳慣れて居る關係で、先代吉兵衛氏の藝を、さほどに上手とは思はなかつたのである、然るに吉兵衛氏の死後になつて、現代の三絃弾を聴くにつけて、初めて吉兵衛氏は容易ならぬ大家であり、稀世の藝格の備つた人であつたことを知るに到つたのである。

吉兵衛氏の三絃は、こゝぞといふて別にとり立てゝ面白味のある藝でもなく、音色にしても、牙え切ると云ふ風でもなく、淨瑠璃の模様を弾くほどの皮肉の藝でもなく、腕が強く、敲きのきく藝でもなく、氏の性格通りの温順な、すなをな藝で、地味であり、上品であり、貫祿の備はつた藝であつた。一般の聴衆からも、單なる三味線弾と思はれて居たばかりか、あの大膽な勢力と、卓絶した伎倆の上に縦横に、何でも語りこなした。越路太夫の相三味線としては、聊か、物足

りぬ思ひもしたほどで、吉兵衛氏が、底知れぬ越路の力量に餘裕をみせて樂々と弾き、越路の晩年になつては、却て太夫を擁護しつゝ貫祿を見せて居たところは、流石に吉兵衛氏なればこそと、首肯させられた。越路太夫歿後は、斯道後輩のために氏の貢獻を期待したに、不幸病魔のために氏を喪ふたことは、雷に、文樂の損失ばかりでなく、斯界のために惜むところである。

自分は、氏の死後になつて、現今の文樂座を通觀するにつけ、彌よ吉兵衛氏の巨匠でありしことを認識すると共に、氏は藝道の蘊奥を悟り得た人であつた事をも知つたのである。

三絃の眞諦を譬えた言葉に「弾け、弾くな、鳴らせ、鳴らすな」といふことは、所謂三絃の藝三味の境地で、よくその眞意を味ふてみれば、いかなる場合でも心に餘裕を持てと説いた教語で、明鏡の澄み切る氣持で、私心を離れ、我慾を捨て、始めて通達せらるゝ眞如の境地を云ひあらはしたことで、之が藝道の根本であり、藝三味悟りの境涯である。吉兵衛氏の藝の境地は則ちこれなのである、今更ながら氏の藝の深遠さをしみつゝと考へさせらるゝのである。故人櫓下の太夫に比較しても、餘りに遜色がないと云はれて、當時としては並ぶものがない越路太夫の淨瑠璃を、別段氣にもせず悠々と弾き、餘裕綽々たる吉兵衛氏の力量は、寧ろ越路に優つた藝格の備つた名匠であつたと云ふても過褒ではないと思はるゝ。

由來文樂座付の三味線彈には、文樂風とでもいふべき傳統

的の藝風があつたもので（現在は然らず）太夫を主役とし、三絃彈は「ワキ役」で、いつも女房役としての勤めを果すことに、洗練されて來た風習が遺されて居つた、三絃彈は一寸でも藝をアテ氣に弾くことを忌み嫌はれて、藝を賣りにゆくとか、與太藝を弾くなどと叱言を云はれたもので、三絃が聽衆から褒められることをも恥とさへ考へて居たほどで、徹頭徹尾呼吸を殺し、音を殺して、淨瑠璃の蔭にかくれて、太夫をうまく語らすことに心懸けたもので、太夫も亦藝に熱申して修行に凝つたものである。古典風を尊崇した時代の淨瑠璃節としては、さもあるべき筈で、太夫を主とし、三絃を従とした文樂の空氣の中で育てられた藝のことゝて、何ごとにも先輩崇拜の美風が藝の基礎となつて居り、互讓の精神と眞の愛情の絡みで、繋ぎとめた仕組ゆへに、比較的樂屋内部の秩序も保たれ、相互の融和もつき、親しみもあり、先輩は部下から心服されて、藝に對する詰責も、寧ろ、藝の勵みとして、喜んで甘受したのである。かゝることで、文樂座の傳統的の藝風も成就され、確守せられて來たのであつたが、時勢の變遷につれ、文化の進運に隨ふて、古典風の存在はいつしかと影が薄らぎゆくとも、淨瑠璃を聽く客の心も新陳代謝して、純粹の大阪人でさへも、娛樂を他にもとめて、やゝともすると、文樂の存在さへも忘れらるゝ結果になつて、二百五十年の歴史のある淨瑠璃の道場も、時勢の波には大なる喘ぎを覩せることになつたのである。

若い大夫や、三味線弾は、急速な時勢の變轉に押され、生活上の脅威に悩み、つとめて聽衆の心に迎合せんとするために、淺薄な、醜き藝が嬉ばれることになつたので、眞面目な稽古に努力するよりも、大衆向きの前受け藝に浮身を變つすことになり、文樂の傳統的藝風も、堅き信念によつて築き上げられた美風も、漸次に破壊されんとしつゝある現狀で、義に於ては君臣でも差別があり、情に於ては父子兄弟でも無差別といふ、古來からの日本精神を、一般の家庭に通俗的に、宗教的に、確く栽へつけて來た淨瑠璃節も、今や興亡を賭する難局に直面して來たのである。

今の文樂座付の上層部にある三絃連中の二三人を除いた外は、昔の彦六座、堀江座の流れを汲む出身者が殆ど幹部を占めて居る。これ等の人々は、團平派の系統に屬した藝風を慕ふて修行して來た人で、固有の文樂の藝風に育てられて來て居ると自稱する三絃彈もあらうけれど、その人の藝風を仔細に吟味し、研究して見ると、どこにか團平畑の臭ひがして居ることを拒む譯にはゆかぬ。これが則ち團平師の藝格が、古今未曾有であつた何よりも瞭かな證據で、今更ながら其藝力の偉大なりしことを偲ばずには居られぬ。團平師は藝道に關する限りは非常な精力家であり、研究家であり、極めて忠實な後輩への指導家であつたのである、生れつきの天才の上に、正氣で鍛ひあげた腕は殆ど疲れるといふことを知らなかつたとさへ云ひ傳へられて居る。その頭腦へ加へて、あの精

力で、寢食を忘れて藝道に精進没頭したのであるから、外の三味線彈がまるで太刀打の出來なかつたのは尤の事で、弟子の又弟子は無論のこと、師の流れを汲む誰れ一人として團平師の藝を親炙せぬものがなかつたばかりか、師の長逝後の三味線界は、恰も闇のやうなもので、斯道の關係のあつた人は勿論、團平師の藝を知る限りの人々は異口同音に師の死去を心から惜まぬものがなかつた事を思へば、斯界の信望を師獨りで蒐めて居たと云ふても決して過賞にはならぬのである。

團平師はそのほかに、淨瑠璃道にとつては忘れてならぬ大きな足跡を遺して居る。師の藝が他の三絃彈に比較して遙かに超凡的であつたと云ふことは、誰もが頷くばかりか、事毎に、追想敬慕を惜まぬが、師が斯道の大乗的主張の藝術家として眞の偉人であつた事は、遺憾ながら斯界の玄人、又は研究家以外の一般大衆には、遍く知られて居ないことである。

昔から三味線彈は、大夫に比して地位が遙かに劣つて居た憾みがあつた。師は藝の實力で、三味線彈の地位を一般に向上させることに成功し、自から之を開拓した先覺者である。昔から三絃彈で一座の櫓下の地位にのぼつたものは師を嚆矢とし、師の在世中はもとより、今猶、三絃の伎倆が、大夫に比較して優秀であり、藝力も遙かに進出して居るのは、之れ全く團平師の餘徳の賜である。

過去二百五十年に跨つて、故人の文豪やら、座付の作者が書き遺して一二回上演したままで、殆ど顧みられずにあつた

古淨瑠璃や、數度上演しても面白味がなく、東西の風格、役場、節付も粗笨極まる、あらげづりのまゝで打捨てゝ更らに探究されず居た淨瑠璃を、殆どのこらず、忠實に改刪添削して、立派な語りものとして完成せられた功績、自身獨創による淨瑠璃新作の上演、故人遺作の文章に節付して淨瑠璃化した努力、師の生前に於ける數限りのない威大な功績は、到底吾等の拙ない筆や研究では、つくしきれることではない。

偉人團平の出現は、淨瑠璃道への清涼劑であり、だん／＼ゆき詰まりつゝあつた淨瑠璃界の革新に、恰も狼烟のあがつたやうなもので、いろ／＼の弊風やら、舊套を打破して、藝の實力主義に向つて邁進したので、三味線が太夫の藝の蔭にかくれて弾くやうな習慣を改めて、時代の流れに沿ふた藝の向上發達を圖り、淨瑠璃も亦時勢に合流して、聴衆の耳をおかさぬやうに、心理を掴むやうに、節は、間を詰め、詞は、寫實風に、太夫の藝が客に當れば、三味線も人氣に投ずるやう綜合的の藝風に仕組を變へ、節付を改善して、自身が多年猛稽古で叩き込んだ先代大隅太夫を弾いて、陣頭に立つて範を天下の聴衆に示したのである。果して團平がこの方針は圖星にあたり、一般聴衆の人氣を喚んだばかりでなく、太夫、三絃の藝の革整ともなつて、藝道の復興を觀るに到つたが、遺憾にも目的の中途で、師は高座の上で、突然に發病死亡せられたが、偉大な師の藝風を慕ふて教を乞ふた太夫、三絃彈の俊才は、師の死後も雲集し、一時は恰も三味線王國の姿で

あり、今日猶ほ三絃界に多才な俊髦を蒐めて居るのは、師が年來培養し育成して來た藝道の至誠に胚胎した結果である。

傳統的の固習によつて地味一本槍で來た文樂座の藝風も、時代の流れは堰とめられず、三味線の藝風は師の薰陶した逸足を、文樂座へ聘へることゝなつたのは、斯道の先覺者であつた師の大乗的氣持ちが實現した譯で、師の靈も永なへに安心し嬉こんで居らるゝことゝ思ふのである。

藝道は競争者があり、對立者が顯はれてこそ互に切磋琢磨せられて向上するので、人間の生存のある限りは、競争が起ることは當然である。淨瑠璃の祖竹本義太夫が始めて大阪道頓堀に、竹本座の櫓を立てた貞享の初めの頃から、元祿時代の淨瑠璃の隆盛期の竹本座(西の芝居、西風の淨瑠璃の起原)に對立して、豊竹座(東の芝居、東風淨瑠璃の起原)が興行した關係から、西座の競争が漸次に、激しくなつて、凡そ元文年間頃までは、淨瑠璃劇として最も發展に意義があつた時代で、僅々五十年間にいろ／＼の貴重な史蹟を遺して居る。兩座ともに作者と、太夫を網羅して、あらゆる手段をつくして股賑を極めたもので、明治の中頃になつてからも、文樂座に對立して、彦六座から、堀江座の當時は、淨瑠璃の全盛期であり、古典として復興しきつたときであつた。藝道はすべて偉人と、天才が出現して來て、始めて意義のある、眞の藝術が生れて來るので、明治年間にあの復活が出來たのは、偏に偉人團平師の出現の結果に外ならぬと思ふのである。



實

事

譚ものがたり

八百屋お七の實説

八百屋お七の事は世傳ふるところ數説あれども皆信するに足らず。就中、演戲にては吉三郎といふものをお七の情人なりと作りたれども是れ甚だ謂はれなきことにして例の妄説なり。今其の實説を得たるにより其の概略を記さむに、加賀侯の足輕に山瀬三郎兵衛といふ者有りけり、本國より屢々江戸の邸に勤番して本郷の上邸かみやしほに僑居せることも多かりしが、其の後故ありて永の暇を賜はり浪人となりければ、再び武家の奉公を望まず、寧ろ商人となるこそ心安けれとて、上邸の近邊には聊の知己もあれば、これを便りたす、終に青物店を駒込追分片町なる某寺の門前に開き、名を太郎兵衛と改めて商業一途に勵みしかば、其の日を安々と送る身となりたり。

しかるに太郎兵衛年老ゆれども夫婦の中に一子無ければ、常にこれを愁ひて、日ごろ信する七面大明神は靈驗最いちよもと著なれば祈請を懸けなば應驗あるべしとて、それより夫婦朝夕七

面尊神を拜し、アハレ我々に一子を授けたまへかしと一心に祈りけるに、其の後妻姪みて終に一女を生めり、これをお七と名なづく、時に寛文八年戌申なり。世に寛文六年丙午とするは謬りなり。

夫婦は大いに悦びて愛し育てけるに、光陰矢よりも疾く、お七も最早年ごろになりければ、夫婦は天晴良き婿を迎へて老後の樂しみとなし初孫の顔をも見たきものなりと思ひ居たるうち、天和二戌年十二月廿八日、近邊より火災起りて見る／＼四方に延焼し、太郎兵衛の家も一炬の灰塵となりければ先づ然るべき方へ一時立退かんとて、其の弟の住持たりし小石川の圓乗寺へ親子三人暫し寓居したりしが、かねて此の寺に寄食せる幕府の家士山田重大夫の次男左兵衛といへる少年ありしが、お七がこゝに父とともに寓居なしてよりは朝夕顔を見合せ詞交したるが縁となり、終に割なき中となり互に人知れず深く語ひしに、幾程もなく其の家の普請も出来上りければ父母は寺を辭して歸りしに、お七のみは家に歸りなば左

中野 三二 允(紹介)

兵衛と逢ひ見ることの協はねば心す、まねど、亦た詮方もあらざれば父母に連れられ家に歸りたり。

かくてお七は露ばかりの間も左兵衛の事を忘れねば、獨り胸のみ塞がりて人知れぬ涙に沈み居りたるが、終に戀ひわびて病に臥し、を、其のころ此の家に出入する吉三郎といふもの有り、吉三郎はもと吉祥寺の門番吉兵衛といふものゝ子にて其の性質放蕩無頼にて、日頃の行狀悪しきゆゑ父より勸當受けしものなれども、太兵衛はいかなるゆゑか其のまゝに交り居りしが、吉三郎は悪才に長けたるものなれば、何時しかお七と左兵衛との中をも察し知りたれば、或る日お七の部屋へ忍び行きて詞を巧みにして左兵衛に遇はせんと欺きければ、世間知らずの娘なれば、何の氣もなくこれを信じて身の上を頼み、禮物なりとて金を渡しけるを吉三郎は受とりて、其の後も屢々往きてはお七より艶書をととりて、これを圓乗寺へ持ち往き左兵衛に渡し、又た左兵衛よりは返事をととりてお七を悦ばせ、其の度ごとに金や小袖などを欺し取りしが、後にはお七に教へて嗜くやう『御身左兵衛に遭ひたくば火事にて再び家を焼き圓乗寺へ行かすしては望みなかなひがたし、家さへ焼けなば戀人に逢はるゝことぞかし、結ぶの神は火事なれば只火事あらんことを祈るべし』と教唆しけるに、痴情に凝りたる小娘なれば、後の難儀も知らばこそ只だ一途に戀人に逢ひたきまゝ、うかと吉三郎の詞に乗り、終に風烈しき日己が家の物干へ上り、屋根裏へ火を放ちたるに、烈風のこ

となれば忽ち燃え上り大火とぞなりにける。

吉三郎はかねて其の紛れに乗じ物を盗まん下巧なれば、旨し〜と獨り笑して烟の中を割つて入り、太郎兵衛の家より金銀衣類を盗みとりて逃出すところを、早くも盜賊奉行中山勘解由が怪しきものなりとて忽ち引捕へて役所に連れ歸り、其の後實を糺せしに、吉三郎は『我れは火を放ちたる覺へはなし、火を放けたるは八百屋太兵衛の娘お七といふものゝ所爲なり』と申立てければ、直にお七を呼出し、吉三郎と對審させけるに、お七は忽ち白狀に及びたり。依つてお七は當時の定律どほり火刑に處せらるべきに事決りたるに、其頃幕府の補佐たりし土井大炊頭（利勝侯にあらず…恐らくは利重侯か）これを聞きて古より重罪を犯す者少なからねど、いまだかゝる少女の重刑に處せられたる者あるを聞かず、今此の如き罪人を見るは清世の瑕瑾といふべしとて、密かに勘解由を呼びて、敢てお七の罪を隠庇するにはあらざれども少女を重刑に處すること天下の面目に關するところ有り、かつて貴殿よりお七は十六歳なりと申立られたれども、能く〜此の段を詮議せられよ、萬一十五歳以下なれば縱令國禁を犯したればとて子供のことなれば其の罪を減すべしと命じられければ、勘解由は其の意を得て、やがて名主を呼出し十四歳の積りで申立つべき旨内命を下したり。

然るに、吉三郎はこれを聞きて、お七の年は十六に相違なし、その證はお七がかねて谷中感應寺の祖師堂に奉納せし二

つの額有り、額面には常在靈鷲山法華最第一と書きて、末に本郷お七、十一歳、延寶四年春二月と認めあり、延寶四年より今天和二年までは六年になれり、然らば丁度十六歳にては候はずやと厭くまで述べければ、勘解由も理につまり、早速感應寺の額を取寄せ見るに、いかにも吉三郎が陳述する如くなれば、法を狂ぐべきにあらざれば終にお七は吉三郎と同刑に處せられけり。——かくて彼の左兵衛はかゝる事どもを見るにつけ、深く悲嘆の涙に咽び、既に自殺せんとまで思ひつめしを住僧に誡められ、お七が後世を吊はんとて出家遁世して名を西運と改めたり、時に十六歳なりしとぞ。其の後、學成り徳進みて世人の尊信淺からず、諸所に常念佛堂を起し、又、諸國の靈跡の破壊せしを再興せしもの多かりしが、元文二年丁巳十月物故せりといふ。

お七が墓は圓乗寺に現存せり、圓乗寺は山號を南縁山といひ小石川指ヶ谷淨泉寺坂下にあり、今は天臺宗なれども古は日蓮宗にて有りしならんといへり、お七の石塔は二基立てり、又、俳優岩井半四郎(四代目)の建てたる碑有り、戒名を妙榮禪定尼と鑄り、又天和三癸亥年三月二十九日と鑄添へたり、半四郎の碑を建てたるは寛政五癸巳年五月のことなり。

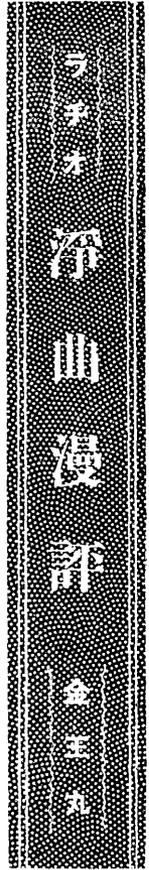
東京(江戸)に於て始めてお七の狂言を演ぜるは寶永五年子の春中村座に於て大名題「中將姫京雛」八百屋お吉實は横萩の息女中將姫(元祖嵐喜世三郎)小性吉三郎實は唐橋

宰相(袖崎縫之助)と脚色み興行せり、是れお七二十七回忌の追善なり、同六丑年嵐喜世三郎江戸名殘狂言として再びお七を勤む、其後中絶して享保三戌年喜世三郎三十七回忌にあたり市村座に於てお七の狂言を興行す(三條勘太郎お七に扮す)、其後四代目岩井半四郎度々お七をつとめて大當りをとれり、依りてお七の墳墓を再建す、五代目半四郎も亦此役を勤めて喝采を博せり。

吉三郎をお七の情人なりと狂言に脚色めるは天保三年喜三郎といふ少年火を放ちてお七と同時に火刑に處せられしことあり、此の喜三郎の喜の字の下の劃を略き、彼の惡漢吉三郎とに混じて狂言に作りしものなるべし。

お七の紋は三つ柏なり、丸に封文は始めてお七を勤めたる俳優嵐喜世三郎の定紋なり、喜世三郎の追善狂言のとき三條勘太郎お七をつとめ此の紋を用ゐて大當りをせしゆゑ是れより後はお七の役には皆な此の丸に封文を用ゐることとなりたるにより終に實事の如くなれり、世に傳ふる古人の紋には此類多し。

狂言にお七が松竹梅の三字を書きて湯島天神へ奉納せることを脚色めるは本文に見えたる感應寺奉額の事を翻案せしにて信するに足らず。



大阪女義
〔六月十六日〕

花雲佐倉曙 宗五郎住家の段

竹本春駒
絃 豊澤仙平

新内などではかなり度々語られるものであるが、義天太では先づ珍らしい。併しお芝居の方では屢々繰返されるから、大衆には行渡つた筋のもの、大阪女義の中堅春駒さんと仙平さんは、土佐太夫の相三味線だつた今の吉兵衛師から教へられたものとあつて、無論本格的に克明のものである。宗五郎の百姓とは言へ、武士の心を持つ確つかりした言葉使ひにも苦心の跡が見え、女房の『夫の難義をよそに見て、命を惜みのめく』と、長らへさうな私ぢやと思つてかいな』と口説き泣く貞節振りも受取られ、一子宗市のい

ぢらしい親思ひには正にホロリとさせられる。手に入つた語り物で近頃成功の部に數へられやう。新聞には『わつとばかりに泣倒れ暫し答へも無かりしが……』まで、とあつたが、降りしきる雪中を、宗吾が堅い決意を以て、出てゆく光景を浮き出させた段切りが誠にはつきりと印象に残つた。

大阪素義 〔六月十八日〕

艶姿女舞衣 酒屋の段

〔カケ合〕

おその 澤田金聲
半兵衛 吾孫子 櫓
母親 有尾アリオ
宗岸 野口生樂
絃 鶴澤勇造
所謂「新人」として、二回乃至四回と

<p>舞 見 御 中 暑</p>	<p>竹本津太夫</p>
<p>豊竹古靱太夫</p>	

マイクロフオンの前に据つた経験者で、誠に今回は、津太夫、友治郎の兩大家から、このカケ合コンビの折紙をつけられた酒屋とあつて、何れもハリ切つて居たであらう事は想像に難くない。さて時間

の關係で、前半おそののサワリまで約四十分間。聴き耳立てる中、唯だ感服敬服の出来榮えであつた事を先づ申上げる。

アリオ氏の母親のつゝましき、生樂氏の宗岸の懸命さ、樺氏の半兵衛の樂々さ、金聲氏のおその美聲など、適材適所は申すまでもないが、最も感服したのは、四人で語つてゐて、決して別々に聴こえず一人で語つてゐるとしか思へぬイキの、稽古の積んだ事である。残念ながら、東京の大家連でも、このイキの合つたカケ合は到底企て及ばぬ事であらうと私かに思つたのであつた。最後に一言したいのは金聲氏的美聲は、正に洗練された美聲に相違ないが、聲に任せて、嫌や味にこそ墮せぬが、小節が利き過ぎて、サラリと行かす、稍や耳觸りでもあつた事で、これはシツカリしたお師匠さんから、少

し叱られたら直らうかと思はれた。失禮御免。

文樂中堅

〔六月二十九日〕

中將姫古跡の松 〓 雪責の段

竹本 伊達太夫
絃 鶴澤 友衛門

暫らく振りの伊達はんのやうだが、相變らずの美聲である『あら痛はしの中將姫』からであつたが『劍をふむが如くて』あたりまで、殆んど地唄を聴いてゐるやうで、どうやら義太夫ばなれのしたやうな、それほどの美聲なのである『起れば叩く割竹に』をわれ竹といひ、後にも隨所に出る「割竹」を皆われ竹と語つてゐたが、我等は『わり竹』の方が正しいとおもふ。一般に御研究濟かとも思ふが、我等はどうもわり竹説を固執する。豫想の通り、後室と廣次が、弱々しくて氣に入らなかつたが、桐の谷は正に上出来であつた。淨聖攝津以來、引退の土佐さん以來、此の上るりも終りかともおも

暑	中	御	見	舞
竹本 鍛太夫				豊竹 呂太夫

つてゐたが、今後幾十回かの研鑽で、伊達はんの物にして上げたいものである。

所で、放送の時間に罪を歸すべきであるが、殊にも姫が打仆れたまゝ、『いひ罵りて兩人とも王子の館へ走り行く』でチョンとなつたのでは、桐の谷、浮舟の苦衷も空しく、況んや豊成公の父性愛から、西方彌陀の御國にて、待奉る父上様と、悲想的結末が、全然相判らぬ事となつて、前後を知らぬ聴者には、何といふ滅茶苦茶な戯曲であるか、と思はせる外はないのである、因に、新聞紙の報ずる所即ち放送局配付の解説には、此の上りの作者を、三世河竹新七——寛政九年二月——とあるが、年代も無論違ふし、その前に『雲雀山』の淨るりを並木宗輔が書いてゐるのがあり、作者不詳といふ方が當つてゐるのではないかとおもふ。三世新七といふは、東都劇場の舞臺脚本に物した作者の誤り傳へられたのもあらうとおもふのである。

花上野譽の名碑 志渡寺の段

竹本文字太夫
枝野澤吉左

文樂の公演では、紋下津太夫以外には殆んど出した事の無い志渡寺、名人團平が先代大隅太夫を弾いてゐて仆れたといふのは有名ななし。相當大物で、今夜は、前半の源太左衛門の條り、坊太郎の桃の條りが省略されて『花は昔と散り失せて今は老木の乳母お辻……』から段切まで語られる。作意の興味は更らに徹底せぬ故、唯だお辻のクドキと祈りの一條に演者の伎倆を聴くの外ないので、一般大衆向きではないが、當夜の文字さんは頗る緊張して、吉左の絃と共に、近頃の上出来であつた。就中、これの子、此方はの、のあたり、病苦？衰弱の息切れの工合、稍や老婆過ぎる懺はあつたが、あの姿が目に見えるやう、殊に『てゝ御か此世に』からは最も良く、クドキから祈りへ飛んで『顔は笑へど心には』や、斷末魔の凄慘さも頗る上出来、と聽

文樂中堅 [七月三日]

暑	中	御	見	舞
鶴	澤	道	八	豊
澤	廣	助		

きしんだ。文樂でも、アタマがつかえて
 稍や不遇の感のある文字さんなど、語り
 物によつては、やはり確かな稽古のあら
 はれが見えて頼もしいことであつた。

東京床語 〔七月十四日〕

奥州安達原 袖萩祭文の段

豊竹巖 太夫
 絃 豊澤 猿藏

只さへ曇る雪空に、心の闇の暮近く：
 …のお袖の出から、祭文まで、始終慎し
 んで語つてゐた事は確かに認められるし
 舞臺數のかゝつてゐる人だけに、更らに
 危ない語り口はさすがである。唯
 だそれ慎しんで語るだけに、平板無事、
 妙味のつかみ處が皆無だつたのには少し
 く呆れる。袖萩の旨らになつてゐないの
 は、大抵の人がさうで、致し方もないが、
 謙杖に力が無く、濱夕が殊に不振であつ
 たのは、此の人にも似合はぬどうしたも
 のだと言ひたい。肝心の祭文も、その本
 文を御存じなしや、ツマリ研究不足、と

いへば、或は酷評と受取られるかも知れ
 ぬ。何もかも知りぬいてゐるやうなお豪
 い太夫さんであらつしやるだけに、かう
 も言ひたくなるのである。要するに、上
 から、そうツと撫でゝゐるやうな上るり
 であつた事は確かである。

A K 新案 〔七月十八日〕

義太夫物語 政岡忠義の段

物語 坂 東 蓑 助
 竹 本 越 道
 絃 豊澤 巴 住

A KとB Kでは、競争的に、常に新らし
 い企畫を立て、演藝の新種目を發表して
 ゐるやうであるが、氣の毒な事には、滅
 多にヒットを放たないやうである。凝つ
 ては思案に能はず、といふは眞に名言で
 あるとのみ思はせる。今宵の義太夫物語
 亦た御多分に洩れぬ代物の一つで、近松
 秋江作とあり、秋江といへば、昔徳田秋
 江といつた老文士で、近年一向振はない
 先生であるが、先づ先代萩の竹の間から

暑	中	御	見	舞
鶴澤清六				鶴澤寛治郎

解説をはじめて、御殿のまゝ、焚を事細まかに、それはしかも、解説ではなく、上りの文句を羅列して、俳優蓑助が、これを頗る低音に朗讀するのである。そして、ハットと思ふと、デンデンと太い絃が鳴て来て、雀の唄の條りを越道が語り出す。と、それがいつもの越道とは似ても似つかず、調子ツばつれの甚だしいもので、ひびきの我等を驚かせる。と『さういふ譯で、いよ／＼御飯が出来る』とか何とか又た物語りになり、やがて榮御前が歸つて行く、御約束の『誠に國のいしづゑぞや』から又た越道がやり出して『人目無ければ』が切れると、又た蓑助が、八汐の殺される處から、悪人滅びて云々と、この戯曲の結末を報告して、豫定の時間を約三四分残して（をはり）を告げたのである。我等がこれを聴くと、實に變哲も無い代物であつて、筋を知らなければ義太夫の解らぬ人間なら、テンからラヂオのスイッチを別の講演か、西洋音楽の方へ切替へるであらう事を考へる。知つてゐるものは、御殿の文句を解

説者の口から蒟蒻版摺のやうに、聴かされるのでは、面倒でたまらぬ譯である。強て、これをやりたければ、珍らしい語物、例へば『葎源氏』だとか、せめて津太夫の『盲景清』だとかなら、又た解説の要もあらうといふもの、又先代萩なら最後までも、これが實説を簡單でも附加へれば或は、それは必要あり興味ありかも知れぬ。近松秋江で脅かしたり、坂東蓑助でごまかさうつたつて、何だいあれは、といふ外はない。噶ッ。

暑中御見舞

繪絹・色紙・短冊・扇子

下谷區仲御徒町一ノ一七

波 間 商 店

電話下谷三七〇五審

暑 中 御 見 舞

桐 竹 門 造

乙 女 文 樂

桐 竹 紋 十 郎

増補大江山『辰橋』を聴くにつけ

机 枕 野 堂

二代目團平師の弾き遣してある澤山な異つた節付は、淨瑠璃界での研究的であるが、其研究が朱入本だけでは至難であるために、段々と世間から忘れられて来て、今の若い大夫、三絃彈では研究するものもなくなり、次第に衰退を辿つてゆき、洵に遺憾なことである。名匠が苦心の節付に成つたものは、永久に繼承して、一般の愛好家に聴かしてほしいものと、毎時思ひ續けて居る。今度BKから「増補大江山、辰橋」が聴かれたことは、團平師追想のために興味深いものであり、師の在りし頃の節を、いろ／＼と更生せしめられて、没我の境に娘しむことが出来た。

辰橋は、常磐津松尾太夫が全盛の頃は、松本幸四郎の「綱」尾上梅幸の「小百合」で非常に人氣を喰つたものだ。義太夫の方はこの常磐津辰橋の模倣で、殆どの筋は眞似られて居り、只ところ／＼文章が變つて居り、節付は全部團平師の作曲で、義太夫として特種の滋味が優れて居る。常磐津と對照して聴き較べると、其特長が瞭りと分つて来る。今度の放送で面白いことは、明治三十三年明樂座で、作曲上演したときか

ら、因縁付である鏡太夫が「若菜」を語り當時の座付の三絃であつた新左衛門と、廣助の兩氏が之を彈き「綱」語りとしての適任者である大隅太夫との取り合せは、最善の適り役で、他の追隨を逸脱した聴きものであり、太夫、三絃、些の油斷も、隙もなく、この頃の焙きつくやうな、苦惱を忘れて、肩のこらぬ、銷夏劑であつた。鏡氏の娘の言葉の描寫は、いつも甘へ過ぎたとも云ふべき魅力があつて、之が氏の特長でもあり、亦、缺處でもあると思へたが、今度の「若菜」は其特長が、びつたりと當て適まつて、華奢であり、娘の生ぶ／＼しい姿形も出されて居り「綱」との詞のアヤと間詰（マツメ）が滑らかで、持前の聲の豊さは、技巧を捨て、蟬りがなく、スラ／＼と語りこなし、詞の後尾に残る、ゑもいはれぬ色氣ある生み字は、却て艶やかさを浮べて、輕妙に出る詞の感觸が、更らに慈とらしくなく、至極自然に聴かれたことは、とりたてて喜しく思ふた。常磐津が耳に残つて居る聴衆には、義太夫として辰橋の節ものを語ることに、或意味で、華やかさ

が足らぬとの誹りもあらぶが、義太夫としては、そこに滋味があり、價值があるので（この事は後で述べることにして）鏡氏の苦心のほども察せられた、所々裏聲を上手に遣ふて、しほらぬ咽喉の美しさは、却て有意味が溢れて、辰橋らしい模様を表現させたのは、御手柄であつた。鬼女になつては、自信たつぷりだ、今更に粗評は入らぬこと、寔に手に入つたものである。どうしたとか、近年鏡氏は若い太夫連中に比較して、役不足の感があり、過去の閑歴の手前か顔負けの姿で、入心皮肉の嘆に堪へぬものがあつたのか、兎角淨瑠璃に眞劍味が淡く、いろ／＼の批判も聴くがかかる語物になれば、氏の獨參湯で、練り鍛えた藝力に物を云はして、若い太夫などは到底寄付けることではない、やつぱり藝は修行であると、しみ／＼感服させられた山神祭の猿稻彦命みたいに、鼻を高くしてよい譯だ。

大隅太夫の「綱」は、素外な裏に含まれた古作の木彫佛の滋味で、どこにも屈托のない、時代離れのした、線の太さと純情さしかも楚々として人を動す、松柏の持つ堅實さがある、強敵、鏡を向ふに廻しての競演、更に優劣のない取組み、伯仲の藝力、流石に大器、大隅なき鏡の豊富な聲量にびくとませず「綱」の笑ひの底力は、天下一品の御家藝で、被是と云ふだけ野暮である新左衛門氏は、平素から話す言葉に、些

の虚飾もなく、切實な氣持ちが溢れて居るが、あの人の弾く三味線がそれなので、氏の個性がはつきりと出て居り、其音色が大きく冴え切つて、漂渺たる櫻花の烟霞の中から發散して居る風情があり、艶麗さに、思はず恍惚とさせられる。廣助氏は竹三郎時代から澤山の上手の太夫を弾いた人で、敲きのきく、間の大きな、藝格が、そうかと思ふと、裏と表の、雌雄の撥を、自由自在に弾きこなした腕であつたが、近年俄然三弦の悟りを開いたものか、旺盛な意氣を隠して、貫祿を見せて大隅太夫を弾ひて居る、三弦は餘裕を味はず風韻が出来て始めて弾ける藝なのである。今度の戻橋の弾き出しには感心させられた。

囃子方の太鼓の音が、餘りに擾がしく、雑音があり過ぎて、寂しい餘情を缺いたのは遺憾であつた。常磐津と違ひ、義太夫節には、義太夫としての立てまへがある。考へ違ひは禁物だ、しかし斷つて置くが、或は放送室の狭ひための反響かもしれぬ。序に云ふが、三味線の大薩摩も、元々、大薩摩次郎左衛門以來からの古典であり、淨瑠璃の系統に屬したもので、唯、達者に弾けばよいと云ふやうな淺薄なものではない。素より唄も充分に研究すべきであるが、三

味線はツヤを消して、莊嚴な氣持ちで弾ひてほしいものだ。常磐津の戻橋も古作と云ふではなく、明治時代に出来た常磐津の新曲なので、それを團平師が義太夫節として語れるやうに作曲したので、古典氣分は乏しく、従つて深淵さも聊か薄い筈なのである。唯、語る太夫と、弾く三味線の力量で面白く聽かれる譯で、常磐津の戻橋は江戸まへもの故に、華奢であり、絢爛さが優れて居り、義太夫は、落ちついた滋味を見せて居る。こゝを狎つて作曲した團平の淨瑠璃化した偉さを聽くべきだと思ふのである。同じ島から生れた淨瑠璃でも、常磐津は江戸に育てられた關係で、江戸の風物、人情、趣味の感化で、節廻し、間取に、華やかさの裏にどことなしに澁澀としたところと、淡泊さがあり、義太夫は、滋味と、古典味と、複雑性が多分に含まれて居る。これは昔の京都、灘波（大阪）が日本の文化の中樞であり、古來から皇居の所有地であつた關係で、傳統的な、氣品と、風懐が自然に淨瑠璃にまで及ぼした結果である。虎屋源太夫の門下から、二つに分れた井上播磨椽の弟子の竹本筑後椽が浪花で義太夫節を作り、其一方の山本土佐椽が江戸へ下つて其弟子、都萬太夫、都一中、宮古路豊

待椽などから數派に別れて擴がりゆき、江戸淨瑠璃の根幹を作つたが、其時代の、富士松、河東、一中、蘭八、常磐津、富本、清元などの江戸趣味の淨瑠璃節の語り風と浪花趣味の義太夫節とは瞭りと異つて居り義太夫は飾とか、聲とかに満足せず、聲を通して更らに奥深い或るものを見出すべく幾世の巨匠、名人が苦心して居る。例へて見れば、もの寂びた庭園の破れ籬、銚ね釣瓶の影に跳つて居る月影が、白くさび切つた風韻と、餘情、そこに落ちついた禪的精神がある如く、藝三味の悟りのために怠らず修行して居るので、三味境こそ義太夫の蘊奥なのである。江戸趣味の淨瑠璃は、丁度盛り上げられた生花の姿で、絢爛であり、多彩であり、所謂意氣な趣きがある。義太夫は茶席に生けた寒椿の一本花で、滋味と、清寂さが肝腎で、猶其上に、花器と、寂しい花との調和の餘韻を好むのである。それだけ當時の浪花（大阪）は、京都に近ひ都びたところがあつたのである。

「太棹」總目次

(五) 自第壹號 至第百號

—前號より重なるもののみを掲載致す事にしました—

- ▼第五拾一號——▼文樂と花道(小泉蛙鳴)▼淨曲うる覺え(田中煙亭)▼逝く年・來る年(一記者)▼僕の義太夫研究(北仙生)▼驪山比翼塚(九)▼東都五十義會第廿回成績▼稽古見臺(黒顔子)▼寶藏寺天昇氏入賞祝賀會▼東都演藝場案内(一記者)▼會報▲口繪(文樂の勸進帳、小泉蛙鳴氏撮影)▼寶藏寺天昇氏入賞祝賀記念)
- ▼第五拾貳號——▼關寺小町に就て(小泉蛙鳴)▼淨曲うる覺え(田中煙亭)▼驪山比翼塚(一〇)▼稽古見臺(黒顔子)▼大日本淨瑠璃協會の設立▼杉山巴仙氏追善義太夫大會▼因會春季大會(金王丸)▼口繪(關寺小町、小泉蛙鳴氏撮影)(渡米の豊澤仙十郎師)
- ▼第五拾參號——▼彼岸日記(小泉蛙鳴)▼淨曲うる覺え(田中煙亭)▼催し順禮記(公孫樹、三久子)▼兜會春季大會▼口繪(須磨の浦の熊谷、小泉蛙鳴氏撮影)(兜會々長鈴木松實氏)
- ▼第五拾四號——▼端午雜感(小泉蛙鳴)▼淨曲うる覺え(田中煙亭)▼自然を好む(保々長平)▼淺間しい限り(竹内たもつ)▼階級を附す要なし(大久保居士)▼驪山比翼塚(一一)▼催ほし順禮記(公孫樹、三久子)▼口繪(帝都素義聯合會記念、神馬芳里氏の先代萩力演、豊澤猿平、豊澤猿藏一座新瀉劇場の盛況)(寺子屋の松王丸、小泉蛙鳴氏撮影)
- ▼第五拾五號——▼どくろ氏の合邦に就て(小泉蛙鳴)▼淨曲うる覺え(田中煙亭)▼東都五十義會春季大會、大會いろく、巴津天會第百回記念大會▼驪山比翼塚(一二)▼口繪(大日本淨瑠璃協會午餐會、東都五十義會、巴津天會、本社五周年記念大會)
- ▼第五十六號——▼東上の文樂に望む

暑	中	御	見	舞
吉良蟻若				柴野筑波

(小泉蛙鳴)▼音曲道智篇(一)(凹次郎編)
 ▼淨曲うる覺え(田中煙亭)▼東都五十
 義會の審査を受けて(仙臺八雲)▼本格
 的な藝はやらぬ(中澤巴)▼新會長鈴
 木氏を迎た五十義會(西田可松)▼驪山
 比翼塚(一三)▼口繪(波多野三樂氏見
 臺開き、故三井篁鳳氏と神馬源太郎氏)
 ▼第五十七號——東上の文樂人形淨瑠璃
 「古靱太夫の壺坂、小泉蛙鳴」双蝶々橋
 本に就て、竹本津太夫「滅つたに出さぬ
 鳴門、竹本土佐太夫」文樂を聽いて、假
 耳老人「今度の文樂世評一覽、一記者」
 ▼文樂樂屋圖繪(一)(宮尾しげを)▼音
 曲道智識(二)(凹次郎編)▼太棹順禮記
 (公孫樹、黒顔子、三久子)▼口繪(富士
 竹本津太夫筆、鶴澤綱造章)(捲土重來の
 湯原清司氏)
 ▼第五十八號——▼音曲道智篇(三)(凹
 次郎編)▼文樂樂屋圖繪(二)(宮尾しげ
 を)▼淨曲うる覺え(三)(田中煙亭)
 ▼私の引退に就て(大塚三鳳)▼太棹順
 禮記(公孫樹、黒顔子、三久子)▼五聲
 會の遠征、其他
 ▼第五拾九號——▼橋本に就ての疑問
 (小泉蛙鳴)▼音曲道智篇(四)(凹次郎編)
 ▼文樂樂屋圖繪(三)(宮尾しげを)▼僕
 の淨曲禮讚辭(田中煙亭)▼東都五十義會
 成績表▼竹田出雲貳百年記念▼新京に於
 ける竹本文太夫歡迎大會▼人形淨瑠璃講
 演と實演▼太棹順禮記(公孫樹、三久子)
 ▼故人レコード蒐集に就て(齋藤拳三)
 ▼秋の豊澤會、其他▼口繪(寶藏寺天昇
 氏、大塚三鳳氏、絃彌さん、朝倉綱菊さ
 ん)
 ▼第六十號——▼文樂座覺書より(安藤
 鶴夫)▼文樂樂屋圖繪(四)(宮尾しげを)▼
 音曲道智篇(五)(凹次郎編)▼大日本淨曲
 協會の女學校進出▼人形淨瑠璃に就て
 (精華女學校五年生)▼義太夫會への希
 望(保坂有曲)▼近松研究會の復活、其
 他
 ▼第六拾壹號——▼年頭社告▼歌舞伎座
 の文樂(小泉蛙鳴)▼文樂樂屋圖繪(五)
 (宮尾しげを)▼淨瑠璃に現はれた日本の
 女性(波多野光雨)▼義太夫と日本精神
 (寶藏寺天昇)▼勤王の志士高杉晋作(一)

暑 中 御 見 舞

柳 有 明

久 保 田 喜 鶴

小樽にての素義會

岡田蝶花形

汽車に寝て小樽へ急ぐ講演の旅明け易き馬鈴薯の花
 小樽なる驛に迎へしわが義弟石井博士と豊澤竹廣
 小樽なる北海タイムス支局三階聴衆少なく氣乗らぬ講話
 日和山千里閣へと案内すと早くも來たる石井夫人は
 これはこれ小樽灣をば一望に眺むにもうれしき千里閣なる
 二時半に早くも山を下りけりわれ歓迎の義太夫會に
 眞打は我が太功記聴衆は講演より多きに氣をよくしたり
 汗にしみし借りし肩衣麻着付干すもかなしや旅はことさら
 ほつと息し停車場に來て四時の汽車待つ美粧師の一行に入る
 また更に汽車に乗り次ぎ旭川北海ホテルの客となりつも

暑

中

御

見

舞

箱根強羅溫泉

茶代
廢止

觀光旅館

電話(一六〇番)
宮ノ下(三一一番)

鶴巻溫泉

小田急線鶴巻溫泉下車

光鶴園

電話伊勢原一一番

眺望絶佳

宿泊料低廉

會報

投稿 歡迎

巴住會

南條 壽光

七月三日及び十一日交正俱樂部にて、豊竹昇登、竹本綾秀兩師應授の下に開催、盛會を極めた。

(七月三日) 酒屋(秀玉、巴住) 梅由(永樂、巴住) 鮎屋(司、昇登) 壺坂(辰彌、巴住) 合邦(壽光、巴住)

(同十一日) 太十(壽光、巴住) 沼津(司、巴住) 柳(綾登、綾秀) 儀作、菊水、昇登) 合邦(龍鳳、巴住)

巴雪會

阿部 一

七月九、十日兩夜八重子會合同にて菊川俱樂部に開催しました。

(九日) 先代(喜光、八重子) 壺坂(和子、巴雪) 又助(重八、八重子) 野崎(登昇、八重子) 寺小屋(一、巴雪) 太十前(梅勇、八重子) 菊本、宮松、鈴木、金橋閣、神樂坂俱樂部其

(十日) 十種香(喜光、八重子) 先代(司、八重子) 安達(喜遊、巴雪) 松王(童雀、八重子) 太十奥(梅聲、巴雪)

なほ、別送番組の通り一葉會の第二回を開催しました。喜久本としては出演者が其地の方々に多き爲め、約二百人の入場者有之近來になき大盛況を呈し、閉會は十時五十分でありました。次回は八月三日文化俱樂部に決定しました。

東都素義の展望と

一二三好會

森 三好

古典藝術義太夫が頽廢しやせぬかと愛義家諸氏の神經を尖らし、一時は同志も皆憂慮せられしことも有りしが、案じるより生むが安し、平素の玄素開演は決して悲觀するに足らずと思料せらる。今帝都の狀態を略記して一つの參考にして見よう。

先づ素玄兩義を一番多く開催する俱樂部は何と申しても下谷區交正俱樂部でしょう。之れに次ぐは本所菊川、文化、入谷、多加良、小石川、駒形、洗橋等にして、尙松尾、菊本、宮松、鈴木、金橋閣、神樂坂俱樂部其

暑	東京から近い
網島温泉案内	品川から京濱線で
中	割烹旅館
見	網島驛西口より半丁
舞	水明樓
	電話網島 一〇七番

他新設俱樂部も十數ヶ所あり、何れも多いのは一ヶ年中休演日は僅か六十日位い、三百日以上も開演して居ることとなる。之を以て見るも決して頼つたものでも無い證據であります、そこで先づどんな藝題が一番多いと云ふ事を掲ぐるも又一興、大體次の様な藝題が一番多い。云俗太十と我家を知らぬ者はない等と耳にする噂さの如く、素玄を通じて太功記十段目は最も多く、之れと相前後して肩を並べる藝題は寺子屋、酒屋、十種香、辨慶、鳴戸、先代萩、本下、壺坂、安達三、合邦、日吉、朝顔、其次へ野崎、柳、玉三、忠六、重

の井、鮎屋、新口、紙治、八陣、忠三、鎌三、稍々珍らしいのは忠四、赤垣、鱒谷、彌作、儀作、蝶八、志度寺、其他勘作、雪實、皿屋敷、加賀見山等もちよいとあります。最も良い義太夫で東都に出演の勤いのは忠臣蔵二段目の清書である、松王屋敷、阿古屋等とたまにはある。

而して鈴ヶ森、油屋、堀川、八百屋お七、阿漕、山名屋、帯屋、新吉原、中將姫等も時々出演せらる。阿古屋の琴責などは玄向の藝題であり帝都の素義にはめつたに出ませぬ。

去る七月八日盛夏體力強練の爲め、牛込矢來町三義太夫稽古所に於て左の如く開演せり文字通り炎暑蒸すが如き中に各自熱演汗の流れざるを得なかつた。

十種香(年清)、太十前(三省)、同奥(三好)寺子屋(一勝)、柳(村雨)、日吉奥(三好)、絃(善三香、三好、二三壽)

岡田蝶花形氏歓迎

小樽 竹 廣 會

岡田蝶花形氏の家庭衛生講習會の講師として來杖せられしを機に、本會同人有志相集ひ七月廿三日正午より小松園花園町會事務所に於て、同氏歓迎義太夫會を開催致し候蝶花形氏の滞在時間僅少の爲め時間勵行、日中の炎暑にも不拘來聽者頗る多數有之盛會を極め申候

出演者並びに語り物を左に

酒屋(萬笑)、太十(千三)、沼津(一遊)、岡崎(若春)、陣屋(靜波)、寺子屋(都)、山名屋(松玉)、妙心寺(蝶花形)

暑	中	御	見	舞
割烹旅館	網島驛東口	來	割烹旅館	永命館
電話網島一三八番	樂	電話網島二〇番		



淨曲無名會

今回は冷房會場公演として七月廿六日 三郎(長局(操、道之助) 壺坂(長平、午前十一時より淺草松屋ホールに開演。 龜造) 山名屋(美峰、猿之助) 帶屋(ど本下(紅司、辰六) 野崎村(國聲、猿くろ、司好)

大阪文樂座人形淨瑠璃の東上

八月二日より明治座に開演

大阪文樂座人形淨瑠璃は、太夫三味線 味線鶴澤綱造病氣の爲め鶴澤重造之に代人形總擧して東上、八月二日より藝題五 里、豊竹古鞍太夫には元の相三味線鶴澤回替りに廿日迄毎日午後四時より濱町明 清六が勤める事になつた。 治座に於て開演。紋下竹本津太夫は相三

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
 ▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
 ▽特種の催はしの外前置きを略します。
 — 記者 —

第二回 一葉會

七月二日喜久本會館に開催。
 御祝儀(巴津子) 先代(喜光、八重子)
 安達(喜遊、巴雪) 挨拶(梅聲) 本下(葉光、八重子) 野崎(和子、巴雪) 喜内(童雀、八重子) 柳(一、巴雪、ツレ和子、巴津子)

義太夫勉強會

第三回を七月三日夜淀橋俱樂部に於て開催。

玉三(柏、巴丈) 岸姫(芦雪、みなと掛合、好造) 日吉(普水、和光) 小磯(松香、朝見太夫) 安達(美津豆、和光) 湊町(都雀、巴丈)

半狂會

七月五日文化俱樂部に開催。
 壺坂(辰彌、昇登) 朝顔(永樂、昇登) 酒屋(龍鳳、巴住) 儀作(菊水、昇登) 赤垣(司、昇登)

新義座の解散

三年前に文樂座を脱退して新義座を組織し、全國巡業の新路を開き藝道に精進しつゝあつた竹本南部太夫、豊竹つばめ太夫、野澤勝平其他の一黨は、途中つばめ太夫の織太夫襲名と共に文樂座に復活した後、竹本陸路太夫を迎へて一座は益々奮闘、各方面の同情と後援と相俟つて

確固たる基礎を築きあげたが、今回南部太夫病氣靜養の爲めこゝに苦闘三ヶ年の同座は惜しくも解散する事になつた。挨拶左の通り。

前略——扱て皆々様の御熱誠なる御後援に依り生れ出たる新義座も去る昭和十一年二月一日以來早くも三年五ヶ月を經過仕り候其間各地に於る公演毎に深甚なる御底護御引立を蒙りたる事一同深く感銘仕り居る次第に御座候然る處此度竹本南部太夫醫師の注告に依り暫時靜養仕る事と相成此儘繼續致す事は至難と存じ乍遺憾座員一同協議の上

解散を決意仕り各々意の有る處に趣き尙一層藝道に精進致す覺悟に有之候間倍舊の御同情と御指導を賜り度偏に奉懇願候

新義座事務所 座員一同

陳者小生共新義座突如解散したるに付愚見をとの御懇請に候へ共只近頃多少健康を害し醫師より當分靜養せよとの勸告を受けたる爲此際一時休演閑地につき度く旁一先解散を決意せし次第にして他に何等の理由も無之候將來の事につきては只今の處何も考へ居らず全然白紙に候へ共身體回復の上は各方面の方々とも相談の上身の振方につき善處致し度き存念に御座候其節は何卒宜敷御聲援御指導賜り度く御願申上候

竹本南部太夫

扱て此度當座解散のこと南部太夫の病氣再發が因となり一時休演とも考へ付きしが此機を幸ひに各々趣く處に趣きて修養なす事も又一ツの勉強共相成るかと思得去る六月三十日全座員協議の上いさぎよく解散と決定仕り候次第に御座候勿論私始め全員共新義座續行は望み居り候へ共旗頭の病氣にては如何ともなり難く此儘無理押に續行致す事は時節柄(地方の情況を考へれば)甚だ無暴の至にて責任者の一人として座員の窮乏明らかなる事はさげ度く遺憾ながら解散各自今後は自由行動と決意仕り候右様の次第にて感想は只各地の御熱情なる御後援を蒙りし御方々に對し微力にして御希待に添ひ得ざりし責を深く御詫申上る心のみが一倍に御座候

野澤勝平

因に竹本陸路太夫は之又病氣の爲め梅田病院にて手術する事になつた。

女義の大劇場進出

竹本土佐太夫上京を機に同師を中心とする東都女義太夫の懇談會が催はされたが、これに端を發して松竹直營として七月廿七日より三日間明治座に於て女義合

同大會が開演される事になつた。再度の歌舞伎座に於ける竹本素女一座の公演に相次ぐ此の合同女義の大劇場進出は愈々新界を賑はす事であらう。

北支慰問の竹澤龍造

留守中三女里子の死亡

九州路巡業中の竹澤龍造師は、一座の内より龍八、龍喜美、才幸、龍佐登、龍

富佐其他事務員男女七名を引連れ、三月上旬門司を出帆北京に於て慰問劇を催はし、次いで豊臺、保定、石家莊、彰德、德縣、天津をまはり、德縣に引返し、それより

意の義太夫劇を以て慰問をしてゐる。なほ内地に残つた一組は八月廿七日まで岡山、廣島、吳等を巡業の上、廿八日門司出帆臺灣に渡り、九月一日より臺北國際劇場に十日間、十一日より臺灣映畫

天津をまはり、德縣に引返し、それより四里の奥地に入り、景縣城○○○部隊に同様慰問劇に好評を得て、遂に同城内に止まる事となり、こゝで○○○部隊長から急築のバラツクを興へられて『三景』と稱し、勇士の爲め料亭を開き、傍ら得

配給株式會社の直營にて三十日迄同島を巡業する事になつたが、龍造師は龍八を同伴此行に加はり、女優十六名、太夫五名、其他囃し事務員等廿五名の一行である。竹澤龜次郎氏よりの便りを左に(寫

離れた景縣城といふ城内に止つてゐます。こゝの○○○部隊長が非常に喜ばれて、一行の爲めバラツクを急築して下さる。竹澤龜次郎氏よりの便りを左に(寫



ろにあるは藤井部隊奮闘の碑)

竹澤龜次郎

竹澤龍造は北支へ慰問に渡り、内地から慰問に出掛けてもあまり人の行かない奥地へ踏み込んで、只今德縣から四里も

とめてゐます。

城外は見渡す限り茫々たる原野で、人家は一軒もないといふ淋しき、時折機關銃や大砲の響が遠く聞ゆる中に、夜はマツチも摺れず、朝は起床喇叭と共に一同起き出で『行て来るぞう、戻つたら又面白い芝居を見せてくれイ』といふ將士を送り、時に依ては彈丸の車の後押しをするなど眞黒ろになつて勇敢に働いてゐます。此間、熱海の留守宅で三女里子が死にました、部隊長に「歸つて來てはどうか」と言はれましたが、龍造は「あなた方のお喜びになるお顔を見ましては子供の死んだ位には歸れません」と遂に死に目にも逢はずにしまひました。

私が残留の一行はお蔭様で各地で好評を得まして、七月廿日からは岡山市の大福座、廣島の郷座、演舞場、吉浦座、呉市の辨天座等をまはり、八月十五日よりは山口縣下を巡業致し、同廿八日門司出船臺灣へ渡り、九月一杯巡業の上十月四日門司へ歸ります。東京の皆々様によるしく御願ひ申上ます。

素絃淨曲研究会

第十一回を七月廿七日午後七時より麴町公會堂に於て開催し、終演後例に依り座談會を催ほした。

戀十(金扇、染登) 忠四(壽瓢、綾秀)
先代(團廣、龍子)

五聲會

七月十六日本郷春木町志久本に於て開催。

紙治(松樂、染登) 沼津(茂里雄、清助)
岸姫(三芳、猿三郎) 酒屋(聲鳳、猿之助、
琴、松四郎)

暑中御見舞

貸並木俱樂部

淺草・雷門
電話淺草二二三五番

義太夫席として皆様のお氣に召す俱樂部で御座います。どちらからも最も便利で落ついて聴くお方まできつと喜ばます。乗物は電車・バス。地下鐵いづれも雷門下車、直ぐ近間でございます。

松葉家音譜普及會

松葉家音譜普及會では、新種追加として左の吹込みを豫約中である。

引窓、阿漕、沼津、湊町、勘作住家、いもり酒、瀧(以上全段)

女淨瑠璃研究会

第四十四回を七月廿四、五の二日間午後零時三十分より四時まで、上野鈴木演藝場に於て開催。

(廿四日) 辨慶(佳世子、佳仙) 吉田屋
(小津賀、紋教) 先代(越駒、紋教) 湊町
(綾千代、猿玉) 儀作(若好、清二) 道行
戀の橋(おはん、佳照、長右衛門、彌周、ツレ、佳仙、佳世子) (清一、ツレ、清二、清三)
(廿五日) 鈴ヶ森(佳世子、佳仙) 長局、(佳照、清一) 鰻谷(彌周、清三) 安達(重子、勝八) 山名屋(越道、巴佳) 戻橋(鬼女、小津賀、綱、越駒) (紋教、ツレ、津賀昇)

かに・天ぶら

御料理

深川區白河町一ノ六

(區役所通り)

一葉

錦 さと

駒猫會・駒女會

合同義太夫會

豊澤猿三郎師の駒猫會と、豊澤延左衛門師の駒女會と合同した第一回義太夫會が、八月七日午後三時より駒込三業見番樓上で催ほされる。番組左の通り。

辨慶(辨慶、みのり)。おわさ、千島。信夫、君昇。太郎、孝千代(絃)(延左衛門)

十種香(梅若) 壺坂(孝千代) 先代(たか) 朝昇(油屋(市松家) 安達(津ぼみ) 野崎顔(一光) 柳(はつゑ) 白石(みのり) (久作、市松家。お光、小以奈。お染、勝酒屋(勝太郎) 新口(はせ川) 寺子屋(小太郎。久松、萬作。母親、梅若) 絃(猿以奈) 壺坂(千島) 太十(萬作) 玉三(君三郎、ツレ、歌吉、しうか、たか)

明治座文樂人形淨瑠璃藝題

第一回

(二日より三日間)

菅原傳授手習鑑

梅王丸、辰太夫。櫻丸、さの太夫、津磨太夫。杉王丸、隅若太夫、英太夫。時平公、相生太夫(吉左) 茶釜酒(相生太夫、道八) 喧嘩場(織太夫、團六) 訴訟(呂太夫、寛治郎) 櫻丸切腹(大隅太夫、廣助) 寺入(文太夫、喜代之助) 首實験(津太夫、重造)

戀飛脚大和往來

新口村(中、播路太夫、新太郎) 切、古鞆太夫、清六) 生寫朝顔日記……宿屋(鍛太夫、

新左衛門、清友) 大井川(伊達太夫、友衛門)

第二回

(五日より四日間)

鬼一法眼三略卷

五條橋(牛若丸 文太夫。辨慶、辰太夫) 隅若太夫、松島太夫、土佐夫太夫、英太夫(吉左、喜代之助、新太郎、吉藏、廣彌、團作) 伽羅先代萩……御殿(鍛太夫、新左衛門) 政岡忠義(伊達太夫、友衛門) 彦山權現誓助劍……杉坂墓所(口、津磨太夫、新太郎) 奥、大隅太夫、廣助) 毛谷村(中、呂太夫、寛治郎) 切、古鞆太夫、清六)

紙子仕立両面鑑

大文字屋(中、文太夫、喜代之助) 切、津太夫、重造) 釣女……(太郎冠者、相生太夫。大名、織太夫。美女、播路太夫。醜女、伊達太夫) 道八、團六、清友、仙松、團作、友衛門)

本誌
後援
名譽
會員

(イロハ順)

(東京之部)

廣瀬 いろは氏
吉川 浪補氏
阿部 一氏
北島 北斗氏
中澤 巴氏
安藤 どくろ氏
吉田 登盛氏
小川 都山氏
安藤 都昇氏
保々 長平氏
栗原 千鶴氏
岸 竹史氏

神馬 里芳氏
岡本 柳光氏
本木 大熊氏
鈴木 和樂氏
小林 和舟氏
林 和勢氏
本多 可笑氏
飛石 かなめ氏
加藤 肥氏
高橋 可遊氏
西田 可松氏
大用 大嘉津氏
田口 辰壽氏

正田 大龍氏
井上 巽氏
小林 太二八氏
根本 團壽氏
野田 高尾氏
杉山 橋氏
坂倉 素遊氏
浮谷 祖樂氏
川口 子太郎氏
小埜 長とろ氏
宮本 武藏氏
萩原 うつぼ氏
乃村 乃菊氏
中野 吳羽氏
山下 彌生氏

國井 やまと氏
菅原 葉光氏
松林 福笑氏
長谷川 文久氏
鈴木 兒雀氏
安藤 光樂氏
水戸部 壽氏
原田 越巴氏
河野 國聲氏
松岡 語松氏
田中 湖月氏
湯淺 光玉氏
岡崎 四六氏
寶藏寺 天昇氏
大築 葵氏

猪谷	歸山	星野	淺田	錦	金田	細川	平井	齋藤	木村	寺岡	中川	柳	及川	松本
銀	歸世	桔梗	奇聲	錦	金鳳	清氏	榮氏	山生	さかえ	三幸	愛氷	有明	旭	朝章
水氏	花氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏

平井	菊池	小原	鈴木	高橋	吉田	池田	北村	野口	横井	吉田	高瀬	岩田	吉良	岩木
壽	秋	松	松	宮	三	三	三	みなと	三	美	操	末	蟻	義
樂氏	月氏	樂氏	寶氏	古氏	芳氏	國氏	葵氏	氏	由氏	地	氏	成氏	若氏	雀氏

(地方之部)	時田	沼井	湯原	近江	白井	松岡	佐野	桑原	平山	高品	武笠	濱口	田口	山田
	靜	盛	清	清	清	茂里	美	美	平	一	宏	秋	司	壽
	史氏	鶴氏	司氏	華氏	華氏	雄氏	昇氏	峰氏	茶氏	重氏	亮氏	華氏	重氏	瓢氏

賜り難有奉深謝候	本誌後援名譽會員を御快諾	名譽會員	八幡古賀	同霜島	横濱和田	下關保良	船橋川奈部	大垣吉岡	神戸岡田	同西本	同兼廣	同杉山	同武	米國平野
太	棧	安藤	長谷川	星野	文	和	銀	十八	源	西	廣	陶	榮	一
社	棧	光	文	久	朝	鳳	司	公	氏	紫	玉	岳	玉	昇
		樂	久	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏

當 座 帳

- ▽安藤どくろ氏 世田谷區野澤町二丁目
- 二〇八番地へ轉居。電話澁谷一六六番。
- ▽大山一徑氏 芝區高輪南町三〇番地へ轉居。
- ▽近江清華氏 中老會を退會。
- ▽飯田緋紗斗氏 福岡縣遠賀郡香月町へ轉居。
- ▽河竹繁俊氏 世田谷區成城町四八五番地へ轉居。
- ▽濱村米藏氏 小石川區大塚仲町五三番地へ假移轉。
- ▽和田春和氏 病氣加療中。
- ▽岡田蝶花形氏 七月廿日出發、北海道タイムス社主催家庭衛生講習會の講師として函館、小樽、旭川を巡回、廿七日歸京。
- ▽豊澤新左衛門 兵庫縣川邊郡伊丹町平松三丁目一九番地へ轉居。
- ▽竹本土佐太夫 七月六日上京、目下滯在中。

- ▽豊竹昇登 四谷區大番町二四番地へ轉居。
- ▽豊澤廣助 七月廿二日上京。
- ▽竹本越駒 本所區向島須崎町八九番地へ轉居。
- ▽豊澤猿幸 本郷區元町一丁目七番地へ轉居。
- ▽豊竹巖春太夫 澁谷區代々木上原町一二八九上原莊へ轉居。

寄 贈 新 刊

- ▽藝 オール演藝
- ▽淨瑠璃月報
- ▽京城のラヂオ
- ▽淨瑠璃時報
- ▽明るい家
- ▽可樂
- ▽大日本淨瑠璃界
- ▽淨瑠璃雜誌
- ▽風
- ▽淨曲新報
- ▽寶塚月報
- ▽文樂
- ▽露
- ▽斯水
- ▽土
- みどり。

訃 音

浮谷祖樂氏 本誌名譽會員浮谷祖樂氏は、急性肺炎にて六月廿九日永眠、七月一日告別式が行はれた。享年六十二。氏は、三福會の會長として永々努力、太十、寺子屋など得意の語り物であつた。

(行發日五廿回一月毎)		號 六 百 第		料告廣	價	定
特 別	一 頁	金 參 拾 圓	圓 申 受 ます	一 部 金 三 十 錢	一 年 分 金 三 圓	六 月 分 金 一 圓 八 十 錢
別 一	一 頁	金 貳 拾 圓	圓 申 受 ます	郵 稅 共	郵 稅 共	郵 稅 共
			金 參 拾 圓	郵 稅 共	郵 稅 共	郵 稅 共
<p>▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます</p> <p>▼誌代は總て前金御拂込の事</p> <p>▼なる可く振替に御送金の事</p> <p>▼郵券代用は一割増但三錢切手の事</p>						
<p>昭和十四年七月廿三日印刷納本</p> <p>昭和十四年七月廿五日發行</p> <p>東京市小石川區音羽二丁目</p> <p>編輯兼 發行人 富 取 壽 鹿</p> <p>東京市牛込區早稻田町五八</p> <p>印刷人 栗 原 榮 松</p> <p>東京市牛込區早稻田町五八</p> <p>印刷所 栗 原 印刷所</p> <p style="text-align: right;">電話牛込一四五番</p>						
<p>東京市小石川區音羽二丁目</p> <p>發行所 太 棹 社</p> <p>振替東京三一七八五番</p>						

ト一ペア級高

莊 綠



○五二ノ二町淵岩區子王
裏局便郵・車下口東驛羽赤

番一八一六谷下話電は又莊弊接直はみ込申御
いさ下用利御を（田坂）

近刊 東都素義名鑑

東都素義界に未だ名鑑のない事を遺憾とします。弊社は皆様の御近影に平素御愛用の語り物を始め、師匠名並に會名其他の略傳を付し、近日「東都素義名鑑」の刊行を企てました。初め「東都素義名流大鑑」といふ名稱でありましたが、皆様の御意見もあり、今回「東都素義名鑑」と改める事に致しました。しかし、もつと良い名稱がありましたなら何卒御教示を御願ひ申上ます。

五月頃には刊行の豫定でありましたが、今後こうした名鑑は五年十年の間には編纂不可能と存じますので、此際お一人も多く御賛同を仰ぎ度く、發行を延期致し極力勧誘申上げたいと存じます。

本名鑑は寫真本位として、一頁金拾貳圓（配本共）四六倍版、上質アート、和製チツ入にて装幀の高雅は、皆様の御机上に一層の光彩を添へる事と存じます。

弊社の此の企畫を御援助賜り、何卒御賛同御申込みを偏に御願ひ申上ます。

太
棹
社

昭和十四年七月廿三日印刷納本

(毎月一回廿五日發行)

太

紳

(第百六號)

定價

金參拾錢

級

高

ルテホ和舟



地番五十目丁一門雷區草淺

(隣社會盡無生相)

番二六六五・一六六五(84)草淺話電